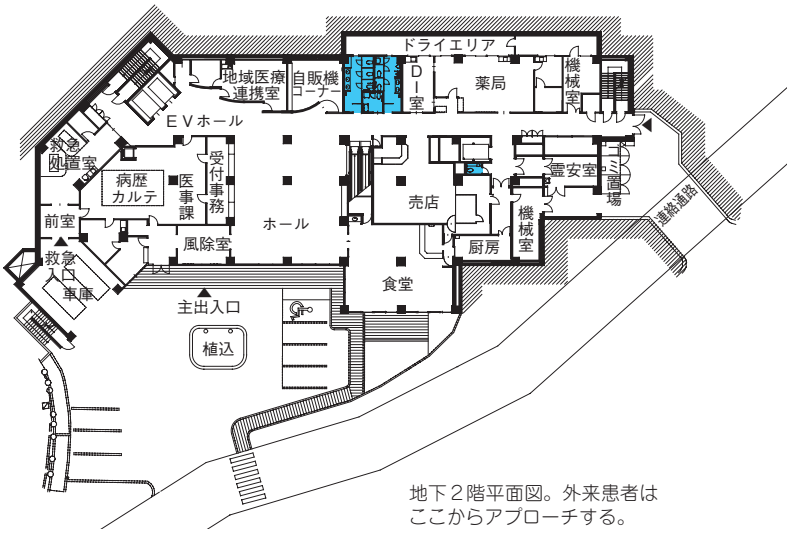
緑の丘の「ほっこり」とした病院
トイレはベッド近くで行きやすく

日本バプテスト病院 / 京都府京都市

設計　地域建築研究所



傾斜地に建つため、車寄せのあるエントランスが地下２階部分になる。



地下２階平面図。外来患者はここからアプローチする。

抜群の景観と厳しい条件の中での建替工事

北白川の丘の上、間近に瓜生山と名峰・大文字山をのぞむ日本バプテスト病院は、傾斜地・風致規制・既存建物の継続稼働と多くの制約条件の下、平成 18 年４月に新館建設工事が完了しました。現在はこれに続く第２期工事が準備されています。

東・北・西の三方を緑濃い山並みに囲まれ、南には京都の街並が広がり、屋上からは大文字送り火が指呼の間という抜群の景観の中、病院は開設以来幾度も増改築を重ねてきました。敷地内には 100 床の老人保健施設・訪問看護ステーション・看護学校が軒を連ね、少し離れれば眼科クリニックまでそろっています。

「旧病院は敷地の入口からエントランスまで８ｍもの高低差があって、患者さんに坂道を上らせていたんです。だから新館では敷地入口からすぐ建物に入ってもらおうと計画を始めました」設計を担当した地域建築研究所の肌勢良雄さんも言うように、敷地は南北方向に大きく傾斜しています。さらに京都市の風致地区条例により高さ 15 ｍ以上の建築物が建てられなかったため、病院はメインエントランスが地下２階にある変則的な建物になりました。地下３階は全体、地下２階と地下１階は南側以外はすべて地中にもぐった状態にし、地上に出ている 15 ｍ分を１階から３階として、ここを採光を絶対条件とする病棟に割り当てています。

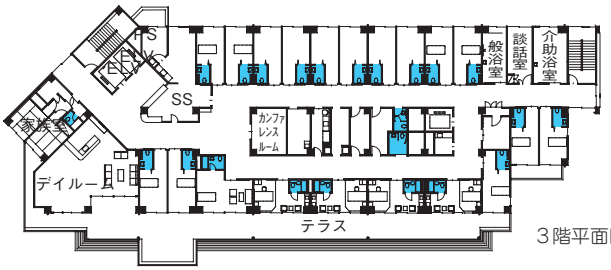
厳しい地形条件に加え、外来診療や入院患者さんの受け入れ・手術といった病院自体の機能は維持しながら「どこか空いているところに建てて移っていくしかない、非常に困難な計画・工事でした」と肌勢さんは振り返ります。そんな中で厳しい風致規制に合致した傾斜屋根や外装の色まで熟慮し、隣接する大原邸の庭をはじめとする周囲の良好な環境に溶け込んだ病院が誕生したのです。

コンセプトは「ほっこりとした癒しの場」

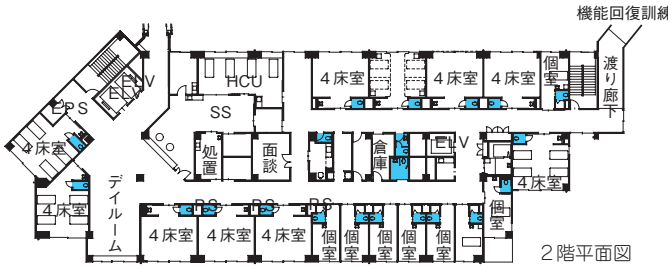
昭和 29 年、米国南部のバプテスト教会の献金によって建てられた歴史を持つ病院は、その根底にキリスト教の隣人愛に基づく「全人医療」をおいています。全人とは人間を「からだ・こころ・たましいからなる全人格的存在としてとらえる」という考え方。

「全人医療とは、ひとりの人間が生まれてから死ぬまでをみて最高の医療を提供していくもので、その根幹は周産期なんですよ。産科小児科、その間に新生児、そこにターミナル、さらに急性期を組み込んでいく、というのがこの病院の立場です」日本バプテスト病院事務局次長兼事務部長の行本百合子さんは、多くの診療項目の中でも「周産期」「緩和」「急性期」の３つが病院の中心となることを強調します。京都府下で最初に認可されたＮＩＣＵ（新生児集中治療室）や、もっとも眺望のいい３階部分に設けられた全室個室 20 床のホスピス病棟は、その姿勢を象徴する施設ともいえるでしょう。

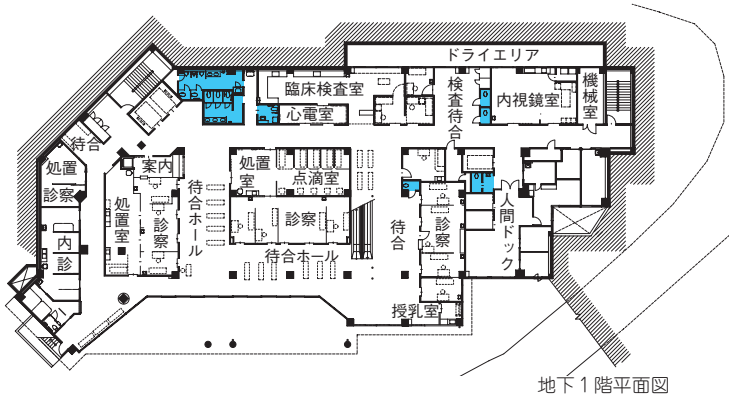
この理念をベースに、今回の建替計画のコンセプトとして打ち出されたのが「ほっこりとした病院」です。ほっこりとは "ほっとする" や "あたたかい" といった意味の



3階平面図



2階平面図

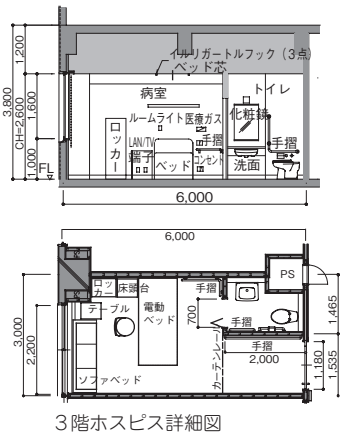


地下1階平面図



上　3階ホスピス病棟。スタッフステーション近くに設けられたデイルームでは、ピアノコンサートが開かれていた。
下　テーマカラーのメロン色の廊下が続くホスピス病棟。各病室には「ひまわり」「ぼたん」など花の名前がつけられ、表示板に写真が飾られている。





3階ホスピス詳細図

関西弁です。病院からこの言葉を示された肌勢さんは「焼き芋が出来上がってパッと割った時にほわーっとくるでしょ、あのイメージで考えました」と笑います。

ほっこりとした病院とは、言い換えれば癒しの場そのもの。「からだとこころとたましいを癒す場として、あたたかく包み込んでくれる空間」をつくるために、基本素材には「木・曲線・光」が選ばれました。

院内では壁や床、家具、手すり、病室の表示板まで、至るところに木目調の材が使用されています。消防法の規定で本物の木を使えるのは手すりやかまちなど一部に限られますが、木目のメラミン系シートを貼った壁材を多用し、病室の床にはフローリング調の長尺シートを採用するなど、全体を木のぬくもりが感じられる空間にしつらえました。美しい曲線づかいがもっとも顕著に見られるのは、エントランスホールの奥にある地域医療連携室と自販機コーナーの壁。これも木目調です。

やわらかな光をつくるためにと肌勢さんがこだわった間接照明も、さまざまな場所で見られます。廊下天井のスポット照明をそのまま床に落とさず壁面に当てたり、病室の読書灯はアーム可動式にして昼間は上に向けたアッパーライト風に、夜は下向きにして読書ができるようにするなど、たくさんの工夫が盛り込まれました。

計画の中でもうひとつ大きな位置を占めるのが、病棟の性格に合わせてテーマを定めた色彩計画です。3階ホスピス病棟は清潔さと静けさを感じさせるメロン色、2階一般病棟は活気があり元気が出るイエロー、そして1階の産科病棟は明るさとやさしさとを醸し出すピンク色。この3色を各階の廊下の床や病室内のクロス類、家具の差し色などに使うことで、全館トータルの木目調空間にそれぞれ違ったイメージで癒しの要素を加えました。

また、患者さんのネームプレート代わりに各病室入口につけられた表示板には透明ポケットがあり、花の写真や絵などを入れて飾ることで病棟の雰囲気をよりソフトにしています。

トイレは1にプランニング、2に空間

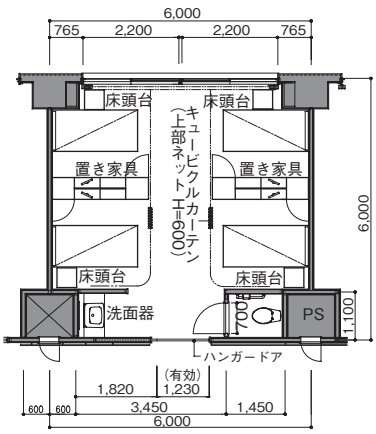
病院全体を癒しの場と考えるとき、トイレは空間構成以前にまずプランニング、と肌勢さんは力を込めます。「患者さんの行きやすさやベッドからの近さとかがいちばん大事。それこそが癒しではないでしょうか」

この考え方から、建替前は集中型だった病棟トイレを、今回の建替では全病室に配置する完全な分散型として計画しました。ベッドとトイレが離れていて行きづらいと、なかなか行きたがらない患者さんが出てきてポータブルトイレが使われるようになり、衛生面でも看護師の負担面でもマイナス、という観点です。

入口位置などのポイントは病室ごとに検討されました。全室が個室のホスピスでは、ベッドからトイレまでの動線を最短にし、入口をベッド側に向けました。ベッドサイドから手すりをまわし、患者さんが最後まで自力でトイレに行ける環境を整えています。これに対し、健康な母体が対象の産科病室は住宅的な雰囲気。木製枠の鏡を



上　間接照明が組み込まれた置き家具によって、専用空間ができ、落ち着いた個室的な雰囲気の４床室。



４床室平面詳細図



住宅的な産科個室は洗面台の上に鏡が掛けられ、まるでドレッサーのよう。



トイレはシャワーユニットと一緒に、洗面の裏に設置されている。

つけたドレッサー風の洗面台が室内を向き、トイレはその裏側でユニットシャワーと集約されました。

一般病棟は個室はもちろん、多床室にもすべて専用トイレが設けられました。多床室に分散配置する場合、同室者間での患者さんのプライバシーを左右するトイレの場所や入口位置は大きな課題であり、最近では病室外に設置することでこの問題をクリアする例も少なくありません。しかしバプテスト病院は室内に置くことを選択しました。これにはもっともな理由があります。

今回の建替に合わせ、大半の多床室にオリジナルの家具が置かれました。ロッカー・本棚・パソコン用引き出しもついた木調家具で各ベッドの間を仕切り、個別空間を確保することで多床室のアメニティ向上をめざしたのです。結果、患者さんの療養環境は格段によくなりました。一方、１ベッドあたりに必要な多床室の面積が家具によって圧迫されるため、トイレの前の面積を室内に取り込むことで問題解決をはかったというわけです。

外来エリアのトイレは検査用などを除いて各階とも北側１ヵ所に配置され、多目的トイレと一般用トイレが隣接する集中型としました。男女トイレとも内部は折り上げ天井から落ちるやわらかな間接照明の光があふれ、スクリーンとブース扉とに採用された木目パネルと壁面の半磁器タイルがコントラストをつくる清潔な雰囲気です。目を引くのは、女子用はもとより男子トイレにももれなくつけられたベビーチェアと、多目的トイレ内とＢ１のアルコーブ部分に設けられたベビーシート。親子二代にわたってお産に利用する地元の患者さんが少なくないという、地域の周産期医療に対して大きな存在感を持つこの病院の姿勢と責任感とが感じられました。

２期目の建替工事の対象は一般病棟となり、病院自体も今後は急性期医療により力を入れる新たな体制を整えつつあります。

「患者さんがほっとできる、風がすっと入ってくるようなトイレがいいなと思いますね」と行本さん。突然の病や怪我を負い、緑の中の病院で入院生活を始める人々を迎え入れる新しいトイレも、必ずや「ほっこりとした」出来ばえになることでしょう。

スポット照明が連なる廊下。平均的に明るくするのではなく、ウォールウォッシャーのように壁面をリズミカルに照らしてホテル的な雰囲気を醸し出している。





折り上げ天井から柔らかな間接光がこぼれる外来エリアの男子用トイレ。